

蒜山自然再生協議会 現地視察 の開催について

令和5年1月18日

開催趣旨

- 平成15年に自然再生の基本理念や手順等を定めた「自然再生推進法」が制定された。同法では、地域の多様な主体が参加した自然再生協議会を設立し、自主的かつ積極的な自然再生活動が推進されている。
- 自然再生協議会は、自然再生の内容及び計画を定めた自然再生事業実施計画（以下「事業実施計画」という。）を作成することとされており、作成後は速やかに国及び関係する都道府県に提出されることになっている。国は、提出された事業実施計画を調査して審査するとともに、自然再生専門家会議にかけて助言等の意見を聴かなければならないと定められている。

令和4年1月 「蒜山自然再生協議会」設立
現在、事業実施計画の検討が進められている。



蒜山自然再生協議会を対象とした、
事業実施計画の作成や今後の活動の参考となるような
助言を行うことを目的とした現地視察を実施

開催日程・出席者

➤ 開催日程

- 令和4年11月 15日（火） 現地視察、現地視察に関する意見交換会
- 11月 16日（水） 自然再生事業実施計画の作成のための検討会

➤ 出席者

- 蒜山自然再生協議会 14名（他、関係者5名）
- 自然再生専門家会議委員 6名（他、16日のみオンライン参加 1名）
- 環境省 6名



開会の様子

蒜山自然再生協議会の概要 - 自然環境とその課題 -

➤ 対象地域：岡山県真庭市蒜山地域

- 標高約500m～600m、東西20km、南北10kmのなだらかな高原地帯
- 蒜山地域の一部は、大山隠岐国立公園に位置

➤ 自然環境：草原、湿原、里山（二次林）

- 自然環境は、生業等で人が関わることにより維持
- 人と自然の関係性の中から、地域の自然を活用した暮らしや様々な文化が生まれた

課題

生活様式の変化に伴い、従来の自然に関わる人だけでの維持が困難となっている。

一方、蒜山らしい牧歌的な景観を求める観光客も多く訪れる。



豊かな自然を観光や産業に活かし、自然や地域の暮らしと観光が両立する仕組みの構築を進めることを目指す

協議会では、自然に恩恵を受ける多くの人々と共に、恩恵によって得られる資源や伝統の観点も踏まえ取り組む

蒜山自然再生協議会の概要 - 協議会の目標 -

蒜山自然再生協議会が目指す姿



(出典) 蒜山自然再生協議会「蒜山地域自然再生全体構想(案)の概要」資料4

先人から引き継がれてきた蒜山地域の自然資源利用の仕組みを
現代に合わせて創り出し、
蒜山地域固有の自然、文化、景観を次世代に引き継ぐ

現地視察場所



(出典) 蒜山自然再生協議会(2022)「蒜山地域自然再生全体構想(案)」を一部改変

視察 昭和化学工業(株)珪藻土採掘鉱区

➤ 経緯

- 珪藻土採掘事業終了に伴い、事業前の状態である「農地」に戻すことが必要とされた。
- しかし、耕作放棄地が増える中、今後、農地としての利用の可能性も低いことから、別の再生方法も検討するため、協議会と連携し自然再生活動に取り組んでいくこととした。

➤ 環境

- 現在も採石法許可は得ているものの、平成27年より採掘しておらず、独自の自然再生が進んでいる。
- 採掘坑は、雨水や点在した湧水からの流入により池を形成している。採掘に伴い、本来ある地表面の黒ぼこ（黒ぼく土）を削っているため、貧栄養状態である。
- 陸上は、主にススキやクロマツ、ヤマハンノキが生育している。

委員等による主な感想・意見（一部抜粋）

- 珪藻土採掘鉱区は、もう自然再生ができているという見方が重要である。
- これからどのようにしたら湿原になるかという検討も必要だが、そのプロセスを見てもらう、楽しんでもらうことも重要である。
- 池の一角について、系統保存のような場所としての活用は良いと考えるが、植物を持ち込む際には、意図しない生物が入らないよう注意する必要がある。
- 企業と蒜山地域の視点から利用を考えて、どのようなランドスケープが描けるか話し合う必要がある。
- 産業遺産としての活用も考えられる。
- 水と土については、基本的な調査を行って頂きたい。
- ケイ素循環について、研究頂きたい。
- 地層が観察できるため、蒜山郷土博物館等の野外展示施設として一部使うのはどうか。



視察 蒜山郷土博物館

➤ 蒜山郷土博物館とは

- 協議会は、地域の自然やそれにまつわる固有の文化・歴史の継承を前提に、自然再生を行うことを目指している。
- そこで、地域の文化や歴史を学ぶことのできる蒜山郷土博物館を見学した。

➤ 草原の利用と冬の手仕事

- 草原は、「草刈山（くさかりやんま）」と言われ、刈った茅は、茅葺き屋根や炭俵等に利用されていた。
- また、湿地帯が多いことからヒメガマを使ったガマ細工が冬の手仕事とされていた。現在、ガマ細工は県指定郷土伝統的工艺品として指定されている。
- 蒜山地域の昔の人は、「2つくらい先の季節を考えて行動する」とよく言い、夏に冬の手仕事のことを考え、生活していた。
- 春の山焼きの後、草原に草が芽吹いてきて1番草の刈り時になる5～6月頃の挨拶には、「ええ草木（そうもく）でがんすなあ」という言葉がある。

委員等による主な感想・意見（一部抜粋）

- 自然資源がとてもポテンシャルの高いものであり、そこに昔ながらの暮らしが関わりながら地域を作ってきたということが、とても印象に残った。



➤ GREENable HIRUZEN（グリーンابلヒルゼン）とは

- 誰もがサステナブルの価値を身近に体感できる観光文化発信拠点施設である。
- 施設内にある「サイクリングセンター」の建物は、蒜山地域の茅が用いられている。

➤ 取組

- 蒜山茅刈出荷組合との連携とした「森のタンブラー 茅」等の商品化・販売を行う。
- レジャーとして自然を楽しむ従来型のエコツアーのほか、参加者自らが自然再生に参加する作業体験型のエコツアーの募集・催行等も行う。

委員等による主な感想・意見（一部抜粋）

- エコツアーや保全活動の拠点にもなり得ると感じた。観光客を連れてくることも重要であるが、企業にこの地域に興味を持ってもらうことも重要であると思う。



視察 鳩ヶ原草原再生地

➤ 経緯

- 岡山県下最大の火入れ草地である鳩ヶ原草原再生地は、希少な動植物が生息・生育しており、山焼き（火入れ）や様々な利用形態により、多様な環境が維持されていた。
- 山焼きは、地元集落により実施されてきたが、生活様式の変化や地域の高齢化による人手不足等により、近年は継続が徐々に困難となってきた。
- 2018年以降は、ボランティア団体である「山焼き隊」が鳩ヶ原全体の山焼きを行っている。

➤ 課題

- 「山焼き隊」は、ボランティアのため、技術の継承が課題である。また、募集をかけるまでは、人が集まるかは不確かなため、不安がある。
- 山焼きは、観光資源として一般にも魅力がある一方で、山焼き中の草原に近づく等危険な行為も見られており、ルール作りが必要と考えている。
- 草原には、昆虫等の盗掘防止のため、自動撮影カメラを設置している。条例による規制をしているものの、現状十分とは言えず、より保全のための対策を模索したい。

委員等による主な感想・意見（一部抜粋）

- 山焼きについて、地元の部落との関係が少なくなっていることが気になった。事情等もあると思うが、もう一度再構築するような方法ができればいいと思った。
- ニホンジカの侵入が懸念されるため、将来的に防鹿柵で囲うことも検討しなければならないと思った。
- 山焼きの炭素貯留効果の研究は、国際的に見ても新規性があるため、炭素固定の貢献度を測定頂きたい。



視察 天谷湿原再生予定地

➤ 経緯

- 湿原は、草原利用と共に草刈りや火入れ等の管理が行われていたが、草原が管理されなくなると共に放置されるようになった。
- 天谷湿原においても、管理されなくなったことで、植生遷移・陸化が進んでいた。
- これまで、草刈り等の保全活動は行われてきたが、持続可能な保全を目指すため、協議会による活動を行うこととした。

➤ 環境

- 天谷湿原には、第一、第二湿原があり、希少種のホットスポットとなっている。
- 人の利用が多くないためか、外来種の侵入も少ない。

➤ 取組

- 鳥取大学による研究フィールドとしての活用や、ボランティアによる簡易木道・休憩用ベンチの製作等が行われた。
- エコツアーを実施するため、地元による草刈り等の管理を行っている。
- 今後の再生活動は、作業者にお金を支払って、継続していきたいと考えている。
- 湿原にはアカマツが生育しており、湿原の保全のためには樹木の伐採を行い、水の量を確保していく必要があると考えている。



視察 津黒高原湿原再生地

➤ 経緯

- 津黒高原湿原再生地は、昭和50年代まで水田だったが、パルプが植栽され、樹林帯となった。その後、リゾート地構想が立ちあがり、業者が地元から土地を買上げたものの、バブル崩壊により、業者から市へ所有が変更された。市は利用することはなく、山林は放置されていた。
- 再生活動を行うきっかけは、2012年に谷の植生を観察するエコツアーの開催場所として希望が挙がったことである。そのため、2012年に調査や地図化を行い、再生活動を2013年から始めた。再生活動を行うにあたり、津黒高原湿原再生協議会という小規模な団体を設立した。

➤ 取組

- ボランティアによって、湿地内に生育していたハンノキ林を伐採した。しかし、湿地周辺も伐採しなければ、日射量が十分にならなかったため、所有者である真庭市と調整し、市の委託業者により周辺の樹木を伐採した。伐採した樹木は、バイオマスボイラーに活用された。
- 木道等の設計、施工は、ボランティア自ら作業している。これにより、何が大切かを実感し、より深い活動となっている。



現地視察に関する意見交換会

➤ 委員等による感想・意見（一部抜粋）

- 活動地は、自然環境という素材が優れているだけではなく、歴史等を総合的に理解することで、サステナビリティの目標から考えても、その物語はとても価値が高いと感じた。取組は、地球規模でも意味があるものになると思った。
- 環境をよくすることも重要であるが、国民の支持を得るようなことも重要と考える。
- 地に足がついたSDGsに関連する取組が行われていると感じた。また、短い視点ではなく、過去の経緯から未来を見据えた長い視点があるというのが良いと思った。
- フューチャーデザインのような考え方で、蒜山地域を協議会として今後どうしていくかを考え、今ある伝統的な物事と自然再生を絡めて物語を作り、世の中が共感できるような仕組みづくりが良いと思った。
- 協議会化によるデメリットとして、何事も協議会で行う必要があると思ってしまうことが考えられるため、取組は各分科会で勝手に進め、それを協議会に持ち寄って話し合うという方法が良いと考える。
- 自然再生という点では、珪藻土採掘鉱区を除き、基本的に生態的な問題があることはなく、再生を阻害するような要因はないと思った。
- 世界目標の一つである30by30により、今までにないほどに生物多様性について企業が関心を持っている。企業は、生物多様性に貢献するために協力できる場所を探しているため、30by30アライアンスを活用することで新しい方法も見えてくるのではないかと思った。
- 草原再生においては、観光だけに頼らない仕組みづくりが必要で、地域住民に対するメリットが見えやすくなると良いと感じた。
- 自然再生の資源も人材も充実しており、それぞれの立場で活躍されている方がいるからこそ、こうして活動が成り立っているのだと感じた。



挨拶



意見交換会の様子



意見交換会の様子

自然再生事業実施計画の作成のための検討会

➤ 委員等による感想・意見（一部抜粋）

- 活動を後押しするような研究資金や助成等を獲得のためにどうするか
 - 地球環境で重要なテーマを目的に置き、世の中に向けて自然再生活動の意義を伝える。
 - ボランティアによる活動ではなく、東京都等から作業をしてもらう人を呼ぶと共に、お金も払ってもらうような仕組みを作ってはどうか。
 - 地元企業も加わり、将来を検討する場を設けてはどうか。
 - 標本自然や文化に関わる情報等を上手く取りまとめてグランドデザインを本にまとめることができれば、それを基に資金確保が出来るし、計画検討の共通の基盤になると考える。
- 蒜山地域外にある標本情報をどのようにして収集し、整理するとよいか
 - 標本情報を提供頂くためには、科学倫理を訴えることが必要である。また、データベース化においては、生物多様性等が理解できるITの研究者を入れる必要がある。
 - データベース化により、利用倫理さえ確立すれば、誰もが使える状態が理想的である。
 - 標本は、湿度管理や防火、盗難の問題等がない建物で管理する必要がある。
- グランドデザインについて
 - 地球環境や、地域の自然・歴史を古い時代まで遡り、位置づけを理解した上で活動すると、さらに発展した取組になると思う。
 - 標本情報のデータベース化によって、どこでどのようなものが採取されたかを上手く取りまとめ、グランドデザインでまとめるとよい。
 - グランドデザイン作成のためには、市民科学が必要とされており、生物多様性の保全に繋がるような科学的知見を集めることが重要である。

